crave for future～王都ギルバード

チョモランマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｒａｖｅ　ｆｏｒ　ｆｕｔｕｒｅ～王都ギルバード

【Ｎコード】
Ｎ９９７９Ｅ

【作者名】
チョモランマ

【あらすじ】
ｃｒａｖｅｆｏｒｆｕｔｕｒｅの続編です。聖が、ギルバード学園に転入。転校初日から精霊メルシーが大暴れ。不思議なお姫様と高慢貴族。ターシャやマリヤ、ジェンネも久々登場します。学園を舞台に、はっちゃける恋愛バトルストーリーです

出会い（前書き）

ｓｔａｒｌｉｇｈｔの方に挟みたかったんですが…分かりにくそうなんで、別に作っちゃいました。とにかく書き続けることが目標です。よろしく。

出会い

季節は春を迎え、風のように月日は夏へと緩やかに進んでいた。

町は人通りも少なく、汗をかきながらマラソンをしている中年の男性や、眠気を押し殺して犬の散歩をしている少年の存在が、妙に朝という時間帯を実感させる。

涼しい朝独特の風…普段何気なく漂っている空気も、服の上から肌で感じることができた。

時刻は早朝である。今聖は、普段ならまず起きていないこの時間帯に、荷物が詰まったバッグを背中に背負い、居場所のなくなった刀を腰に下げながら、のんびりと歩いていた。

ギルドの住む町から、首都ギルバードまでは馬車を走らせればほんの数刻。徒歩で半日程の距離である。平らで何も無い平原が聖の横に広がり、それを縫うようにして、平坦な一本道の道路が行く道を示していた。

「そう言えばラスルコフ学院とやらに行くのはいいが、どこに泊まるんだ？」

隣には精霊であるメルシーが、興味深げに質問を浴びせてくる。どうやら初めての体験、一人暮らしや主都への旅路に興奮しているのは聖だけではないようだ。

「確か寮…とか言う専用の屋敷があるんだって。一人部屋だといいな。」

「そうだな。聖と私以外はいらないだろう。もし他の奴がいたら追い出すしかないな。」

「…はは…本当に一人部屋ならいいな～。」

本気でやりかねないメルシーを横目に、穏やかな日々にするために是非とも一人部屋がよいと不安を交えながら願う聖だった。

「それで、そこには本はあるか？森は？そもそも…」

単純な質問と応答の繰り返し、だが会話が尽きることはない。聖は迫りくる質問に少々たじろいでいた。

その会話の最中、僕の背にある荷物が歩くたびに背中とぶつかってきて、さっきから軽い痛みと衝撃音が妙に耳に響いてきていた。この中身……実はほとんどが本なのだ。

別名メルシーの分身。宝物。人類の遺産？…出発二日前の夜。必要最低限の物意外、入れないでって忠告してバッグを渡したのに、朝起きたらベッドの横にパンパンに膨れ上がって同情が沸き起こる程の、哀れな物体が横たわっていた。

家中の本をかき集めたのか…辛うじて見える隙間からは四角い本が見え隠れし、背中が歩くたびに硬い衝撃を受ける。角が当たって偶に結構痛い…すぐに中身をチェックしたら、案の定大量の本が…まぁ全部が恋愛小説や冒険もので、手放したくない気持ちも分かるんだけど、さすがに焦った。

「私に道中死ねと言うのか？これらを読破するいい機会だ。これから行く先にあるとは限らないしな。」

「いや、そんな長い道でもないし、…しかもこれ持つの僕なんだけど…せめて半分に…」

必死の説得も懇願も意味をなさず、母さんまでもが、『何いじめてるの！メルシーちゃんが可哀想でしょ』とか言い出す始末…味方は一人も存在せず、結局泣き寝入り…いや、そこまではとりあえず我慢できた。メルシーにも散々聖も読めだの力説されたのは置いといて、我ながらよく決断したなと感心するくらいだったんだけど…

道中一冊も本を読んでいないのは何故！？

「ギルドには行くのか？私の予定と大分かけ離れてしまっているのだが。」

「うーん…あんまり興味はないかな……」

生返事をしながら、本について触れるか触れないか…ここで言おうか言うまいか聖は割と真剣に悩んでいた。そんな聖の戸惑いに気づく様子もなく、メルシーは笑顔で質問を投げかけてくる。

でも、何だか嬉しそうだしな…ここで…言いづらい…もの凄く言いづらい…

心中で軽く葛藤…していたその時、道幅いっぱいの大きさの馬車が、もの凄い速度で後方から近づいてきた。遠くから見てもはっきり分かる…あの見事に装飾された外装、只ならぬ気品が伝わってくる。時たま町で見かける貴族の馬車とも明らかに格が違っていた。

多分馬を操っている業者も、格好いい燕尾服を着こんだ執事とか

かな～と、安穏に想像していた聖だったが、

「み、道を開けてくれ～～～～そこの人！！！死～しし、んでもいいのかーー？？？」

「は？」

思わず疑問の言葉を投げ交わしてしまった。なんと馬を操縦していたのは、想像したのよりは少し若いが、黒い燕尾服を着た真面目そうな青年だった。必死に手綱を動かし、興奮しているのか異様に赤い顔が聖の目をくぎ付けにした。

ちょっとイグリオートさんと似てるな…などと気楽に思いつつ、道を譲…避難しようと足早に道路から退出した。

「なぁ聖。あの馬車を止めて、首都とやらまで乗せてもらったら凄い楽じゃないか？あんな馬車に乗れたら、その重い荷物ともおさらばできるぞ？」

滅多にない画期的なメルシーの提案に意表を突かれ、思わずちらっと顔を覗き込んだ。その両目は馬車に奪われ釘づけにされていた。それも、とびっきりに羨ましそうに…これも小説の影響だろうか。

「いやいやいや、あんなに急いでるんだしさ。止めること自体無理だよ。」

メルシーには気の毒に思ったけど、あの速度の馬車を止めるなんて並大抵のこと不可能だろう。例え馬車の前に飛び出したとしても、乗ってるのは貴族の人間だろうから関係なしに轢かれちゃうだろうし…あれを破壊する勢いでやらないと到底…

「大丈夫だ。今こそ修行の成果を見してやれ。」

案の定、爽やかな顔をしているが、十中八九それは破壊してでも止めろという意味だろう。

「ここで成果とか言われても…無理無理。乗せてもくれないよ。」

「…そうか…じゃあ、奪えばいいか…馬なんて手綱をひっぱって鞭で叩けば前に進むんだろう？」

満面の笑みで、喜々として馬車を指さしながら言った。問題解決と言わんばかりの口調である。指さされた馬車を眺めながら、無意識に右手で頭を掻きながら、溜息を吐いた。そうこう言っている間に、先ほどまで後ろにあった馬車は、最早視界から消えつつあるのである。

「…そんなに乗りたいの？そもそも、それは強盗って言って犯罪なの。だいたい…そうだなぁ…小説みたいに、窮地に陥っているところを助けたりとか、落し物を持ってたりとかさ、そう言ったあり得ないことが起きない限り、現実はそううまくいかないって。」

「……じゃあ、いいんじゃないか？」

「え？」

メルシーの指が、その一言と共にまたもや後方に向けられる。馬車の騒がしい音と、馬車を引っ張る四頭もの馬の嘶きで気付かなかったが、その指先には、明らかに武装した四人の集団が颯爽と馬を走らせていた。それぞれが殺気立ち、近寄りがたい空気を全身に纏

っていた。

出会い（後書き）

ターシャ：せっかくの新スタートなのに私の出番は？登場は？
マリヤ：それを言ったら私だって…
ジェンネ：あんたたちは何言ってんだぃ。初登場は私に決まってるさ。なぁ、チョモランマ。
チョモランマ：はい……恐縮です……
メルシー：馬鹿め。お前達の出番なんてあるはずないだろ。私と聖だけだ。そうだろ、チョモランマ
チョモランマ：あの…（睨まれる）…はい……恐縮です。……どうしよう……

第一話；先手必勝

ものすごい速さで、あっという間に馬車は遥か前方へと視界の端から端へと消えていった。それを追いかける四人組。メルシーは闘う気満々だ。すぐさま実態化して聖の髪に両手を重ねた上に顎を乗せ、嬉しそうに目の前に来る男達を待ち構えている。

メルシーとは対照的に、聖は当惑気味だ。馬に乗り、全速力で駆けて行こうとしている者達。全員が褐色で重量感のある鎧と兜を装備している。聖にはどうしても騎士達が馬に乗る様が、盗賊や野党には見えないのだろう。むしろ、噂に聞くギルバード三部隊の一角、それか教皇直属の聖騎士隊のような正規の部隊ではないか…と思うと、メルシーの言うとおりに行動して、はたして無事にギルバードに入れるのかさえ分からない。

（最悪捕まって、ギルバードに入れないで強制送還だよ…）

それだけは何としても避けたい。母親はともかく、レートニイやターシャに合わす顔がないのだ。特にターシャ。街を出る時に、怪我をしているので別れの挨拶はあえてしなかったのだが、今思うと自分は奈落の底に一歩足を踏み外したのかもしれない。そう思ったのはついさっきだが、逆に不味かったのではないかとだんだんジレンマに陥ってくる。

「聖。私が合図したらやるぞ。あの屈辱の戦闘から幾星霜…今こそ新必殺技のお披露目だ！」

ロムとのことだ。あの森での死闘。結果はともかく、その過程がメルシーにはお気に召さなかったらしい。聖から手をどけて、その

右手にはめられた指輪へと姿を移した。興奮し、やる気に充ち溢れているのが、指輪を通して聖に伝わってくる。

「いや、ちょっと待って。実はあの馬車は強盗で、騎士四人が追跡してるって仮定するとさ。僕たち、完全に同罪だよ？」

メルシーの暴走を抑えようと、聖は心中あわてていたが、努めて冷静に告げた。

「それならそれで、騎士四人を倒し、さらに強盗逮捕！そして馬車を使って悠々首都に行くことができる。完璧だ。非の打ちどころがないこの計画。はは、いいことずくめじゃないか。」

メルシーは高々と笑っている。

「…うーん……そううまく進むとは……」

言葉とは裏腹に、聖はどうやら諦めつつあるようだ。経験上、メルシーのテンションがここまで上がっていると、止められるのはアミリヤくらいだ。盗賊退治に向った時の出来事が鮮やかに脳裏に浮かんでくる。

「いくぞ、聖。意識を深く、深く、集中。ゆっくりと周囲の大気と同化していくイメージだ。」

「了解。」

聖は目を瞑り、手を胸の前に合わせる。穏やかな微風が、あたかも聖の意識と同調するかのように緩やかに渦巻いていた。

（イメージは…鷹。）

「重圧の烈風！！」

唱えた直後、馬を走らせていた四人の頭上に、遥か上空から一直線に風で作られた四匹の鷹が、放たれた矢となって急降下した。

第一話；先手必勝（後書き）

色々忙しくて遅くなりました。更新もっと早くなるように頑張ります。

第二話：風の通り道

それは一瞬の出来事だった。

正直メルシーに言われるがままに放ってしまったのだが、狙いは正確に相手の機動の要である馬に絞った。追いかけさせるのを妨害するのが目的なのだから、その狙いは正しいだろう。四人中三人の馬は、突然の奇襲に甲高い悲鳴をあげ怯えてしまい、制御しきれず振り落とされた。

しかし、残った一騎は風による威嚇をものともせず、猛然と聖に向って疾走していた。この一瞬で即座に、聖を敵として認識したようだ。騎士の敵意と殺気が、怒気と混じりあい完全に聖に向けられている。

聖と騎士の一騎打ちだ。

「貴様！我らを誰だと心得ている！！邪魔をするのなら、子供でも容赦せんぞ！道をどけろ。」

騎士が怒鳴り声をあげた。声に異様な迫力がある。恐らくそれは実戦に裏打ちされた自信なのだろう。手には先ほど声を張り上げると同時に抜いた大剣。兜の狭間から見える険しい眼光は、決して見せかけではない。

「怯むなよ聖。こういうのは怯えたら負けだ。もう一度、意識を集中。」

「…了解。」

騎士の渾身のひと振りは、もう目前に迫っている。

（イメージは…高くて硬い金属…）

「竜樹の太刀風！」

聖は騎士のひと振りがぶつかる寸前で、冷静に唱えた。

驚いたのは騎士だった。振り落とす寸前、確かに手加減はした。だがそれは、単に殺しはしないように、確実に戦闘不能、最悪致命傷でも構わないという考えの下での一撃だった。

その一撃が、自分には見えない何か…によって弾き返された。そのうえ、堅固な鎧で覆われた体が、乗っていた馬ごと思い切り吹き飛ばされた。衝撃に耐えきれずに、馬ごと地面に転ばされた。この男にとって、今の自分の現状が信じられなかった。たがその瞳は、よく晴れた空しか写さず、顔を右に向けると、馬が倒れていた。

それと同時に自分を取り戻し、痛む腰の悲鳴を無視してすぐに立ち上がった。

男の顔が、驚愕と恐怖で思い切り引きつり、酷く歪む。

（あり得ん…精霊使いなんてもんは、今まで散々見てきたが格が違う。恐らく…あの一瞬で強固な風の盾をつくりあげた。半端な盾で俺の一撃を防げるはずがない。しかもあれは、言霊…なのか…言霊に似てはいるが、言霊とはあんな一言で発動できるようなシロモ

ノじゃないはずだ）

「お前は一体…」

喉から絞り出すように出した声だ。もっとも、呟いた時にはさっきいた少年の姿はなく、まるで夢でも見ていたかのような、そんな虚しさが胸に残った。

「隊長！！今のは一体……」

隊員の心配そうな声が後ろから聞こえてくる。隊のリーダーたる自分が、いつまでも放心しているわけにもいかない。圧し掛かる責任と使命の重さで、己の心を震わせた。

「すぐに追いかける！！行くぞ！」

「…馬が怯えてしまい、すぐにはとても…」

「ッツ。くそったれ。」口の中で舌打ちし、忌々しい先ほどの少年の姿をもう一度思い浮かべながら、地面を蹴り飛ばした。

第二話：風の通り道（後書き）

…すみません。忘れた頃にこられてもって感じだとは思うのですが…ちょくちょくこれから更新します。完結させたいと思ってます。暇つぶしにでも読んでもらえるとありがたいです。

第三話：波瀾万丈

何でこうなっちゃったのかなぁ…

聖は今更ながら、心中で葛藤していた。

「聖、見えたぞ！あれだ、あのでかい馬車！！」

そんな聖をよそに、メルシーが瞳をきらきらと瞳を輝かせながら前方に指をさした。

馬車がみえる…

（ラグルを出たら、ちゃんと勉強しなくちゃとか、友達とかできるかなぁとか料理どうしようとか…こう結構平和で楽しい想像してたんだけどな…）聖は声には出さずに呟いていた。

頭の中で必死に現実逃避しようとしているが、蟻地獄がごとく、もがけばもがくほど足を取られ沈んでいってしまうように、際限なく不安が広まっていった。明らかにどこかの騎士団に所属している人間に、咄嗟ではあったが全力で敵対してしまったのだ。正直指名手配されていそうで怖い。そもそも、ラグルを出てそうそうこんな事態に出くわすとは夢にも思わず、想像との落差に死にたくなる。

聖は砂埃を巻きあげて進む馬車のすぐ後ろで、風をまとい、飛ぶように地面を走っていた。こんな長い距離をこの速さで走ったことはなかったが、まるで風が体を運んでくれているかのようだ。とても軽い。

一方御者は、必死に鞭を打ちつつ、背後に先ほどまで追いかけてきていた盗賊たちの殺気や馬の駆ける音が、全く聞こえてこなくなったのを不審に思い、首ごと体を右に向けた。

そこに、人間ではありえない速度で走っている少年と、全身真っ白な少女がその傍らに浮かんでいるのが、否応なしに視界に飛び込んできた。

心臓がドクンと跳ね上がり、その少年の黒い瞳と視線がぶつかった。

「ひっ！！ばば…化け物！おおお嬢様！！もう無理です。引き換えしましょう！ももうお楽しみになられたでしょう！？」

御者は顔を恐怖で歪ませて、首筋を痙攣させている。発狂しそうになりながらも、現状を打開できる唯一の希望に声をかける。そう、このご主人がそもそもの原因の発端なのだ。

「……」

だが、馬車にいる姫には何の反応もなかった。ただじっと窓から、あっという間に変わりゆく景色を楽しんでいるようだ。もっとも、広がるのは緑一色の草原と、蒼い空に浮かぶ雲、その下を優雅に飛ぶ鳥であり、御者には何が楽しいのか全く分からなかった。ただ呆然と窓の外を、苛立たしいほど落ち着いて、自分に苦しめと言わんばかりに眺めているようにしか見えない。

「ちょ…ちょっとお嬢様！もう許して下さい、いやほんとに。だだ、大体何がしたくてこんなバカな真似をさせるんですか！！」

この御者の名はアレク＝クラクスマン。父親を若いころになくし、母親により１７年間育てられた。聖の故郷であるラグルよりも、さらに西に位置し、ギルドもない長閑で平和な田舎に退屈し、刺激と都会の女性を求めて、野心を胸にギルバードにきたのが運のつきだった。

「……」

確かに聞こえているはずだが、完全に無視を決め込んでいる。

「な…何怒っていらっしゃるんですか！？こここれでもわたくしは、精一杯頑張りましたよ。あなた様がわたくしを脅しになるから…それはもう浮気はいけないことです。重々承知しております。けれども…けれども、紳士で真摯なわたくしといたしましては、好意を向けてこられた女性をないがしろにするなどとても…」

背が高く、端整な顔だちをしたアレクは、ギルバードでもやはり女性に人気があった。それにより、都会の熱気に興奮していたのも手伝って有頂天になってしまい、女性を誘惑することは、自分の当然の権利だと言わんばかりに、御者でありながら、勤めていた屋敷の女中をはじめ、手当次第手を出し始めた。

だがつい最近、よりにもよって屋敷のお嬢様にばれてしまったのだ。ギルバードの４機関。その中で、法律を代々司っている４伯爵の一人の愛娘だ。彼女はすでに、数々の恋文を証拠として手中に押さえ、悠々と脅してくる。アレクにとって、もしそんなことがばれたら一貫の終わりだった。女中だけならまだしも、ある公爵の人妻のもとに夜な夜な通っていたなんて、十中八九公爵の手により私刑に処されるだろう。最悪拷問、死刑もないとはいえないのがまた恐ろしい。

そして、馬車の中にいる、この冷血無感情最凶悪魔は、自分がいうことを聞かなかったら、遠慮なく即座に大公開するだろう。

「聖、あいつ何を早口で喋ってるんだ？」

「さぁ…それより素で化け物って言われちゃったよ…かなりグサってきた…うん。」

どうやら聖にとって、化け物という言葉は相当ショックで、例えるなら不可避のナイフのようなものだったようだ。胸に手を当て、目を下に伏せて軽くいじけている。

「褒め言葉じゃないか。」

メルシーが肩を叩き、慰めるように微笑んだ。少し嬉しそうだ。

（フォローになってないよ。）

聖の実力が認められたようで、得意になっているのだろうか。その一言が、不可避のナイフを、毒つきナイフに昇華させ、もう一本聖の心臓に突き刺してくる。

聖は馬車に並んだが、かといって無理に攻撃するわけにもいかず、よく考えたら止めるには御者を説得するしかないのだが、思いっきりパニックに陥っている。今度はどこかの浮気男の文句を馬車の中の人に訴えている。これが許されるなら、自分も許されるみたいなことを言っているが、聖には墓穴をほっているようにしか見えなかった。

どう見ても会話の一方通行。幸か不幸か終わりの見えない会話に付き合うほどメルシーの気は長くない。けれど、聖の体力消耗度の方は遥かに激しく、速度が遅くなり始めた。幸いと御者は思い、手綱を激しくふるい速度をさらに上げようとする。

（もう無理かなぁ…）

隣であの御者を狙えと痺れを切らしたメルシーが怒鳴り、御者が口を紡ぎ、怯えて身をすくめるが、そこまでして止めるつもりは毛頭ない。せめてこんな立派な馬車に乗っている人は、どんな人か一目見ておこうと他人事のように思い、聖の背たけでは届かない馬車の窓の部分までジャンプし、中を覗こうとした。

揺れるカーテンが少し邪魔であったが、そこには確かに人がいた。それも美しい少女であた。陶器のよう白い首と、メルシーとは対照的な黒いゆったりとしたブラウスが視界に広がった。だが聖には一切が目に留まらず、偶然にも窓の外を眺めていた少女の瞳にぶつかり釘付けになってしまった。

少女の瞳が大きく開かれ、唖然としているかのように一瞬見えたが、恥じ入るかのように、その表情を消した。そして、未だに語りかけてくるアレクに向かって言い放った。

「……ふぅん…アレク、止まりなさい。」

それはいつもと変わらず、ひどく冷たい一言だったが、かすかな声の違和感にアレクは内心首をかしげるのだった。

第四話：お嬢様

アレクはお嬢様に命じられるがまま、喜々として馬車を止めた。綱を持っていいた手が疲労でしびれている。命じられた逃避行がようやく終わったという達成感と、心臓がつぶされそうな心労によって、全身に汗が噴き出ていた。

大体2時間ほど前になる。命じらたお嬢様（悪魔）の要求。それは

「私をつれてひたすら逃げなさい」

という、意味の分からない一言であった。

無論、選択肢は一つしかない。なぜこんなことをするのかという質問も許されず、広大な屋敷を背に無我夢中で馬を走らせていた。その途中でまさか盗賊に後ろから追いかけられようとは、後ろから聞こえてくる馬の蹄の音だけで、心臓が縮みあがった。アレクの故郷であるアムセンでは夜盗なんて、滅多に出没したりはしない。つまりは何もない田舎出身のだけなのだが、それゆえ恐怖の対象でもある。

「ふぅ……」

アレクから安堵のため息が漏れた。

追われている最中、周りにはやされ人妻に手を出したことを本気で後悔した。アムセンにこのまま帰れたらと何度思ったことか。だ

が、それはもう過去のことだ。現実を見てみよう。懸念は後ろにいる少年（化け物）。よくよく顔を見てみると、雰囲気も落ち着いているし大人しそうだ。

髪と瞳が黒いのが特徴的だ。少なくともアレクは生まれてから一度も見たことがない。少々不気味に感じはするが、まだ成長しきっていない華奢そうな体に、あどけなさが顔に残っている。どうやら向こうも戸惑っているようだ。何となくだが、故郷の少年たちと似た雰囲気を感じた。それだけで、血走りながら追いかけてきた盗賊よりも、数倍マシだった。

「…ふぅ…落ち着け…落ち着くんだ俺…相手は子供…子供…」

再び呼吸を整え、耳に響く心臓の音をどうにか抑えた。はっきり言って、アレクには戦う力はない。自慢できることといえば、パーティでの口のうまさと社交上手といったぐらいか。どちらにしろ、戦ったら負ける。逃げかえっても旦那さまに殺される。

（よし、迎えの騎士が来るから早く逃げたるがいい！それまで不肖、このわたくしが相手になろう！と言いきるしかあるまい。相手は所詮子供だ。弱いやつには強く強い奴には弱い。そしてすかさず、実は俺はファンフェル隊の一員だ、無駄な戦いはよせと怒鳴ってやる。これで怯えて逃げるだろう。）

最悪の場合は…お嬢を囮にしてでも逃げきってやるとアレクは考えていた。何をしてでも生き残ろうとする執念。もちろん目に美しく映る時もあるが、手段によっては大変醜い時もある。この場合、無論後者である。

「おい！ーーーーそこ……」

ガチャ…馬車の右ドアが、ゆっくりと開かれた。アレクは思わず言いかけた言葉を紡ぐのを止めた。まさか、あの気難しいお嬢様が馬車から自ら出てくるとは…アレクは想像もしていなかった事態に対応できずに呆けていた。その間に少女が馬車から下りた。

「お、馬車が空いた。」

メルシーは本気で言っているようだ。一体どこの世界に持ち主が下りただけで自分の物になる馬車があるのか。聖の額にうっすらと冷や汗がでた。さすがにこれは強盗になるし、明らかに（騎士への攻撃も少し怪しいが）犯罪だ。

「馬車に乗りたいなら、別に一緒に乗せてあげてもいいわよ。」

少女はメルシーを横目に、聖に喋りかけた。

「当然だ。あいつらを追っ払ってやったんだからな。」

それにメルシーが口をはさむ。

「さっさと乗せろ。なぁ聖！これでギルバードまで楽に行けるな。」

「……やっぱり歩いていこうよ。急いで行けば今日中には」

その瞬間、後ろから頭を思いっきり叩かれる。地味に痛かった。

「なんでそんな意地悪を聖は言うのだ？理不尽だ。」どうやらメルシーは少し拗ねてるらしい。声ですぐに分かる。とても分かりや

すいや。それはいつも自分に真っすぐなメルシーにぴったりで、ちょっと羨ましい。

「遠慮はするもんじゃないわ。あたし、あなたとお話したいの。」

少女は聖の目を見つめたまま、その目を決して離そうとしなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9979e/

crave for future〜王都ギルバード

2011年9月11日22時41分発行